古人（いにしえびと）に導かれ

山下 一恵（山下 名緒野）

（昭和四十九年卒）

やました・かずえ（やました・なおの）
東京芸術大学音楽学部邦楽科卒業
幼少より母都築声に箏の手ほどきを受ける。
鳥居名美野先生に師事　現在に至る
東京芸術大学非常勤講師を経て、洗足学園音楽大学組歌講座講師。
ＮＨＫ「邦楽のひととき」「邦楽百番」「邦楽花舞台」に出演。
本日、アトラクションにおいて演奏予定。

私たちが生まれ成長するまでの間には色々な事があります。成長してからは、さらに様々な事に見舞われ、悩みます。そして人生の秋を迎えては、（同窓会の当番幹事を済ませた頃）「あるがままに受け入れる」という禅の境地に少しでも達したいと気取ります。平安に生きた古の人々はどのように物事の優先順位を決め、どのような事象にどのように心を尽くしたのでしょう。

私はおよそ四百年前に作られた古典音楽を学んでおります。専門は江戸時代中期に江戸で生まれた、三絃を伴った弾き歌いを原則とする山田流箏曲です。歌詞の題材は「源氏物語」「平家物語」「古今和歌集」が多く、まさに古人が主役であり、演奏するときは古人の意識に倣い、隠れた思いを理解するよう心がけます。音楽からの理解ですので、かなり偏っているかも知れませんが、古の人々が如何様であったか、私の箏曲への思いも込めてご紹介してまいります。

多くの曲のテーマは恋愛や左遷のうらみです。現代人も抱えてる大きな問題ではないでしょうか。遠くへ追われた者は「小夜更けて鳴く千鳥　何を思ひあかしねうきよを須磨の恨みにて　我とひとしき涙かや」と。女性同士の勢力争いは「葵の上のときめき　賀茂のものみのをりからに　くるまあらそいつれなきは　深きうらみなるべし」。

許されざる恋は「人目しのぶのなかなれば　おもいはむねにみちのくの　千賀の塩釜なのみにて　へだててみをぞこがるる」恋の喜びは「八十の翁　こいにこしをそらいた」。　恋のため、大いに若返ったということですが、今も少しも変わらない感じですね。

では、自然に対する美学や人生観はどうであったでしょうか。散るからこそ桜は愛しい、と言い切ります。川の流れは常に変わるから人生そのものと言い、夏と秋が行き交う空を感じ、月は満ち、満ちたら欠けるからおもしろいと。そして、北へ渡る鳥に名残惜しみ、同時に満開の桜や人との出会いを楽しみます。なんとも複雑で貪欲で繊細です。現代の私たちも満月を見れば昔の人も見ていたのだと感慨を抱き、偶然桜に出会えば足を止めます。心を奪う美しい景色も、奪われる人の心も、変わっていないではありませんか。

数ある曲の中で私が最も憧れる曲に「四季の曲」という三百六十年ほど前に作られたものがあります。この曲を通し、古人と一緒に春、夏、秋、冬を楽しんでください。

春、「春は梅に鶯、つつじや藤に山吹」。この詞を歌いながら箏は梅の匂いや、春の色、そして鶯の鳴き声を連想して奏します。そして「桜かざす宮人は花に心うつせり」四季の中で春が一番好きだと思い、「心うつせり」と歌います。

夏、「夏は卯の花、橘、あやめ、蓮、撫子、風吹けば涼しくて」。暑い時に吹く風は今でも格別です。箏はそれぞれの花の姿に相応しい音を出します。涼しげな風を耳から肌に感じられるよう十三ある全ての糸をかき流します。そして「水に心うつせり」暑い夏もいいものだと思えてきます。やはり、夏が一番好きだと思います。

秋、「秋はもみじ、鹿の音、千草の花に松虫、雁なきて夕暮れの」。出だしの音は既に秋の音でなくてはなりません。千草が秋風にそよぐ様子や、つま恋う鹿の声や、松虫の鳴く声がそのまま伝わるよう気を配ります。「月に心うつせり」。秋の月は心に染み渡ります。

冬、「冬は時雨、初霜、あられ、みぞれ、こがらし、さえし世のあけぼの」。歌詞は次々と自然現象を述べます。同じ奏法をもって春夏秋とまるで違う空気が伝わらなければいけません。そして「雪に心うつせり」。

この曲の歌詞はなんて単純でしょう。箏の旋律や奏法も極めて単純なものです。古典音楽の大半は、最後に世の無常を伝えます。しかしこの曲は四十余文字のうち、人の感情は七文字のみ。他は自然にあるものを並べているだけです。最後の「心うつせり」、この一句と偉大なる作曲家　八橋検校の手により、古人の美学と禅の心が伝わって来るのです。

虫の声、風の音、水、雷、雪、花、木。古の人々はこの世にある全てのものに意味を見出し、心を奪われ、昨日と今日の空気の違いをかぎわけました。そして、音楽に携わってきた人々は、このような豊かな、また、繊細な心や、自然の変化を一瞬の「間」や「一音」で表現しました。

しかし、明治時代を迎え、文化革命とでも言うのでしょうか、そのような音楽家達の間でも、平安の頃から続いてきた音楽の価値が覆されました。第二次世界大戦後はなおさら、古典音楽を志す者は少数派になってしまいました。私自身寂しく、この先心配になっておりましたが、近年、古典回帰の傾向が強まってきました。先人が真摯に守り続けてきた古典音楽というものは、それだけ奥が深いということなのでしょう。それと同時に、現代に生きる私達の内にも、古人と同じ日本人としての心が確かに受け継がれていると感じます。

私は何百年の間残ってきた曲を演奏するたび、古人の美意識を共有でき、最高の幸せを感じます。そしてこの幸せを与えてくれた先人たちに感謝を込め、次の世代に伝え残さねばと思います。

演奏の技術だけでなく、音楽を通じ、古人に倣い、欠けた月は必ず満ち、散った桜はまた咲き誇り、悲しい別れも新しい出会いも全て受け入れ、心ゆくまで楽しもう、という思いも。